



管内の各学校においては、平成28年度第2学期のまとめに力を注いでいらっしゃることを思います。

さて、今回の学び通信「ぐんぐん」第5号では、本年度これまでに実施している次の3つの事業についてまとめ、各学校の取組の参考となる内容を紹介いたします。

- 1 「全国学力・学習状況調査に係る中学校管理職説明会」
- 2 「学校図書館活用教育研究事業」
- 3 「授業の質の向上プロジェクト事業」

1 全国学力・学習状況調査に係る中学校管理職説明会

10月に実施した全国学力・学習状況調査に係る中学校管理職説明会では、参加された管理職の先生方、学力育成の担当の先生方に

「授業改善及び家庭学習に係る学校マネジメント」

について充実した協議を行っていただきました。

この協議の中で明らかになった学校マネジメントのポイントをご紹介します。中学校だけでなく、小学校でも是非取り入れていただきたいポイントばかりです。

① 教科の垣根を取り払った授業研究グループの設定

中学校の授業研究協議の場が特定の教科の教員だけで行われると、どうしても協議の内容が専門的な内容に偏りがちになります。教科の垣根を取り払った授業研究グループを設定することで、子供サイドに立った指摘がなされ、子供が主体的に学んでいたか、指導者の指示・板書等が子供に明確に伝わっていたか、子供同士での学びが見られたか等、指導者にとって有益な協議をすることができます。

管内の中学校でこの取組が進んでいます。

② 年間を通じた「一人一授業」公開の場の設定

授業の展開を黒板に明示する等、子供たちの学びを支える「見える化」の手立てを図ることはもちろんですが、常に授業の「見られる化」を図るということです。「見られる」ことで授業・指導が客観的なものになり、子供にとって学びの多い授業の在り方に気づくことができます。

管内では全教員が年に一回授業公開する学校が増えてきています。

③ 授業の目標(めあて・ねらい)及び振り返りの設定状況の把握と改善

授業の目標(めあて・ねらい)及び振り返りを適切に設定することは、学習意欲を向上させるとともに、学習内容の定着につながっていることを再認識する必要があります。

調査結果からも島根県では授業の目標(めあて・ねらい)が明示され、授業の最後に振り返る活動を行っていた割合が全国より高く、組織的な改善が図られていることが明らかになりました。

しかし今回の協議の中で、例えば授業の目標(めあて・ねらい)の設定では「実験をがんばろう」と漠然と表現されたり、「平安時代」と教材名で表現されたりするなど、めあて・ねらいとして適切でない場合があること、さらにめあて・ねらいは書かれているが、やや形骸化し

ているのではないかという指摘がありました。

授業の目標(めあて・ねらい)は、学習課題として表記されたり、行動目標で表記されたり、教科によって表記の幅がありますが、全教科等を通じて共通する目標(めあて・ねらい)として、①前時とのつながり、あるいは授業の導入時の子供とのやりとりの中でめあて・ねらいの設定がなされているか、②抽象的あるいは曖昧な表現ではなく、子供が理解しやすい表現になっているか、③子供たちにとって授業のゴールの姿となっているか、④めあて・ねらいとまとめの整合性が図られているか、⑤子供が主体となる言葉で表現されているか等、全教員でその在り方について確認をしていただくことが必要です。

④ 全国学力・学習状況調査の問題を全教員で解いてみる

我々教育事務所指導主事が学力育成についてお話しする際に、今後求められる学力について先生方に一番よく伝わっていると感じるのは、調査問題を実際に解いてもらっている時です。全ての調査問題をやっていただく必要はありません。学力育成担当者の方が適切に選んだ問題でやっていただければ、今後求められる学力、自分の専門教科での指導の在り方等がはっきりします。数値結果や一般的な傾向等を聞くだけでなく、実際に調査問題に取り組んでいただくことで先生方の気づきが大きくなります。

ぜひ一年に一度は調査問題に取り組んでみてください。

⑤ 「知識・技能」と「活用」のバランスのよい指導

調査結果から「活用」の力が弱いことが指摘され、「活用」の指導の場が意識され始めたことはよいことであると捉えています。ただ「活用」に急ぐあまり「知識・技能」の指導が十分に行われておらず、十分な活用の結果が出ていないことがあります。「知識・技能」と「活用」は車の両輪。「知識・技能」が身につけているかどうかの確認をしながら、「活用」の指導も同時に行うことが重要です。

今一度学力育成策を点検していただき、「知識・技能」と「活用」のバランスのよい指導について配慮をお願いします。

⑥ 自主学習の内容の把握と改善

中学生の自主学習ノートで、ページ全体が同じ漢字でうまっている、あるいはページ全体に簡単な計算が続く等指導者のねらいとは異なる自主学習ノートの実態があるようです。

自主学習によって、子供たちに何を育てたいのか、また自主学習で子供はどのような姿を呈していればよいのか等、全教員で確認する必要があります。

管内の中学校では、モデルとなる自主学習ノートを他の生徒に紹介する、また中学校区で小中合同で自主学習の在り方を検討する取組を行うなど自主学習の質を高める取組が始まっています。

⑦ 授業改善に基づく家庭学習の検討

子供が指示されたドリルをこなすといった宿題だけでなく、「授業に生かせる」「宿題をしないと授業が受けられない」宿題を出すことが考えられます。これは単元全体を見通した授業改善なしには考えられません。単元全体について子供に見通しをもたせ、計画的に家庭学習を行わせることが大切です。

⑧ 保護者との連携

家庭学習の充実を図ろうとする時、スマホ等の携帯端末、パソコン等のメディア接触が課題となります。このことについては、家庭との連携が欠かせません。子供たちにメディア接触の在り方について直接指導することはもちろん、保護者に対して学校としての考え、ルールを具体的に提示しながら家庭での指導・管理をきちんと行っていただく必要があります。目に見える形で継続的に伝えていくことが重要です。



2 学校図書館活用教育研究事業

今後の学力育成を考える時、学校図書館活用教育が重要になることはご存知のところですが、管内の小学校で先進的に取組を進めている学校があります。学校図書館活用教育を通じて、児童生徒の「情報活用能力の育成」、「思考力・判断力・表現力の向上」を図る取組です。

この事業のこれまでの取組成果から、どの学校でもすぐに取組を始めたい内容をお伝えします。

○事業名 学校図書館活用教育研究事業（島根県教育委員会指定）

○指定校 出雲市立今市小学校

出雲市立西野小学校

出雲市立北陽小学校

雲南市立佐世小学校

○指定年度 H28年度～H29年度



指定校の研究実践から導き出されるどの学校でも
すぐに取り組みたい3つの内容

① 校長先生は学校図書館の館長

学校図書館活用教育を推進する際の鍵は体制づくりです。まず、「学校図書館の館長は校長先生」であることをしっかりご理解いただき、機能する学校図書館活用教育の体制づくりに十分配慮していただくことが必要です。

司書教諭は授業者と学校司書をつなぐ連携の中心を担います。課題となるのは、打合せ時間の確保です。この課題について連携がうまくできている学校では「連絡カード」を活用しています。「連絡カード」を授業者→司書教諭→学校司書の順に回し、目指す授業の姿を明らかにするとともに、授業後も同じように「連絡カード」を回し、反省を記載することで次の取組に生かします。

「連絡カード」には、司書教諭や学校司書に学習で使用する本の準備をお願いするだけでなく、授業でどのように本を活用したいのかなど具体的なことを記載しましょう。

② 自校の児童・生徒に身に付けさせたい情報活用力の明確化

学校図書館活用教育において、自校の児童・生徒に身に付けさせたい情報活用力は何か。

例えば、身に付けさせたい力が、必要な情報の取り出し、調べた内容の要約であるならば、これらの指導の場を全学年で重点単元として系統的に設定します。そのことで、計画的に指導を行うことになり、教育効果の高い組織的な学校図書館活用教育を進めることができます。

③ 学校図書館活用教育年間指導計画の見える化

②が決まったら重点単元を一覧表にして職員室に張り出します。さらに、学校図書館の使用日、図書準備、司書教諭の時間割など、具体的な準備・内容について付箋に記載し張り付けていきます。

これらを行うことで、教職員に指導の系統性が意識されるとともに、組織的な取組の重要性の認識が高まります。また、授業のイメージがわきやすくなります。さらに、時間の許す限り、普段から授業を見合い、学校全体で指導の一貫性を図ることが重要です。

3 授業の質の向上プロジェクト事業

「しまねの学力育成推進プラン」に基づき、めざす学力(学ぶ力・学んだ力)を子供たちが身に付けられるよう、算数科を中心に授業改善に取り組み、実践研究の公開や教材開発を進め、研究成果を普及することを趣旨とする事業です。

この事業においてもこれまでの取組成果から、どの学校でもすぐに取組を始めたい内容をお伝えします。

○事業名 授業の質の向上プロジェクト事業

～算数授業改善推進校事業～（島根県教育委員会指定）

○指定校 出雲市立大津小学校

雲南市立掛合小学校

○指定年度 H28年度～H30年度



指定校の研究実践から導き出されるどの学校でも
すぐに取り組みたい3つの内容

① 全員参加の授業

子供が授業で受身になっていると学びが深まらないことはご理解いただけるところだと思います。一部の子供が一言も発言をすることなく、板書をノートに写して1時間を終える授業を見ることがあります。

そこで、子供同士の関わり合い、学び合いの視点からペア、あるいはグループ活動を取り入れ、全員が自分の考えや疑問を声に出して表現できる授業を目指します。

このような指導のスタイルを継続することで、普段から少人数での効果的な話し合いがなされるようになり、形式的な発表で終わらない授業を展開することができるようになります。

② 子供を主体として展開する授業

子供が授業の主体となる授業を目指します。

誤答や「分からない」を取り上げ、みんなで考えることで「あ！そうか！」「なるほどね」と共感し、解決していく経験が大切です。

説明をするのは子供、かじ取り役を教師が務めるようにします。最初は稚拙であってもよいので子供に説明をさせ、その考えを授業の中でいかし、子供の考えで授業が進んでいくようにします。

教師は子供の実態を見取りながら、子供の困り感に沿った展開になるよう、意図的な指名をし、全体思考を深めます。

③ 授業の振り返りを次時、学級経営にいかす

授業の振り返りの時間を大切にします。

「自分はどうか考えたのか」「どこが違っていったのか」等、自分の理解の状態を自分で診断する力をつけることが確かな学力育成につながります。

ただ感想を言わせるのではなく、友達の考え方の良さ、学び合った良さ、自他の成長等の視点で振り返りを書かせ、次の学習をよりよく解決していこうとする態度を育てましょう。

また、その内容を学級で紹介することが学級の連帯感や学習意欲を高めていきます。子供の成長を学級全員で確認し共に喜ぶ時間を設けるようにしましょう。